

「神去なあなあ日常」 三浦しをん 著 徳間書店

昨年のこのコーナーでは「最近あまり本を読めていないため過去に読んだ本の中で、学生の皆さんが手に取りやすく読みやすい、旭川高専の図書館にも置いてあり、かつ、私自身が好きで何度も読み返している作品」として三浦しをんさんの「風が強く吹いている」を紹介しました。あれ以降、図書館で働いている者として、あまり本を読んでいないのはいかなものかと、色々話題の本などを読み、今年の推薦する本は何にしようか…と考えましたが、今回も昨年と同じ理由で、三浦しをんさんの「神去なあなあ日常」を紹介しようと思います。(お察しのとおり、三浦しをんさんが好きなのです。)

高校生活をなんとなく過ごし、やりたいこともなく、将来のことも考えないようにしながら卒業後は適当にフリーター生活を…と考えていた都会っ子の主人公は、卒業式の日に担任から「就職先を決めてきてやったぞ」と言われ、突然携帯も通じないような田舎の山奥へ放り出されます。何も知らないまま「林業」に就くことになり、何度も逃げだそうとしますが、林業に従事し、この村で自然を相手に生きてきた人たちとの交流を通じて、気持ちの変化が現れ、少しずつ成長していきます。本作は、そんな主人公の目線で村での1年間で語られる…という体裁となっています。

「林業」という職業にスポットを当てた物語ですが、主人公の気持ちの変化や成長していく姿は思わず共感し、応援したくなります。また、「仕事」に対する真摯な姿勢は、林業に限らず、働くことすべてに当てはまる気がしました。

三浦作品に出てくる登場人物は、どの作品も魅力的な人物が多いのですが、本作に出てくる登場人物達もまた、魅力的で生き生きとしています。山や森の自然の力強さや偉大さ、恐さ、そして、それらと共に生きる人々…どンドン物語の世界へ引き込まれます。

読みやすいタッチで、気軽に読めると思いますので、あまり読書をしない方にもお薦めしたい1冊です。映画化もされていますので、興味を持たれた方はぜひ併せてご覧ください。